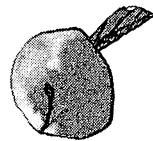


加藤辨三郎 述

歎異抄

8

文 責 本誌編集部



自身の心の中の動搖

関東から上洛してきたお弟子たちが、念佛のほかに道理をご承知ならご教示くださいませませんかという気持ちで質問したのに対し、親鸞聖人は、理屈を知りたいのなら、南都北嶺へ行って聞くがよろしいと答えられました。このお弟子たちが上洛したころの関東、つまり親鸞聖人が帰洛後の関東では、お弟子たちの間に、さまざま異説が起きていたのであります。たとえば念佛を称えていても、他から

強く説を立てられると、遠くにいるお師匠さんには聞くこともできず、そちらの説になびく方もあるのではありませんか。

事実、親鸞聖人のお師匠さんである法然上人のご在世のころは、多くのお弟子たちは、ただ念佛で統一されていきました。それゆえに、ほかの理屈をいう人なんか出そうもありません。ところが法然上人がお亡くなりになると、勉強家の秀才のお弟子さん方から、すぐ、それぞれ理屈が少しずつ入った説が出てきたのです。たとえば、そのひとつ

に、一念義多念義ともうし、乃至一念について説いているのです。

一念義とは、念佛は一回称えるだけでよろしく、あと十遍だ、百遍だ、一万遍だと称える必要はさらさらがない、と強く主張したのです。強く主張するところですが、そもそも法然上人の道にも、親鸞聖人の道にも外れるわけです。

これに対して、また反対派が出ました。念佛は一回称えるだけでいいわけではない。やはり念佛は多く称えるほどいいんだ。法然上人も一日に三万遍もお称えになられた。われわれも一生懸命に木魚を叩いて、朝から晩まで念佛を称えたらいいのではないか。法然上人も一回称えるだけでいいとは思ってはいられなかったはずだ。やはり多いほうがいいと思われて、念佛の回数を多くなさっていた。それなのに、一回称えたらいいなんては、とんでもない間違いだ、と主張するのです。これを多念義といいます。

この問題に対し、親鸞聖人は、乃至一念というのは、一回でもいい、けれども一回が重なれば十回ともなり、百回ともなる、ゆえに乃至というのは一番少ないところは一回だけれども、多いところは生涯称えて何千万遍になろう、

それで差し支えはない、乃至一念というのを、このように頂戴している、それが念佛相続の実態というのだとお説きになっているのです。

このほかにも、たとえば諸行往生ということをお説き人があります。しかし法然上人も、親鸞聖人も念佛往生を説いていられます。念佛往生の意味をわからせようと思って、諸行往生を途中で教えているわけです。諸行往生というのは、道徳を守らなくてはいけない、いろんな経典を読まなければならぬ、あるいは戒めを守らなければならない等々あるのです。だが、そういうことのできない者は、ただ念佛一つで、ちゃんとその境地に入らせてもらおう、これを念佛往生というと説いていられます。

こんなことで、法然上人のお弟子さんのなかでも、まちな説が出ました。親鸞聖人の場合でも、関東でそういう兆候が見えていたのではないかと思われまます。それがみんなの心を動揺させたのです。みんなの心の中に疑問が起きました。念佛一つ、それだけで往生極楽は、ちょっと虫がいい話ではないか、やはり戒は守るべきじゃないのか、少なくとも守ればいいことではないか、道徳も大事なことで、この世を渡るのは道徳を守らないでは世のなかが乱

れる一方ではないか、しかしそういうことは一向に説かれないというのは行き過ぎではないか、それから念佛一つとなれば、神さまは念佛への援護をなさる神となつて、信心の上では、神さまのほうは、ちよつとわきにやられる、その上、神棚も要らないといわれては、氏神さまのあり方にも気になる、それまでして念佛を称えなくても、よいのではないか、ということを言う人も出てくるのです。

これは、だれが悪いかが悪いばかりではなく、実際は、自分自身の心のなかで動揺が起きたのです。今日のわたしたちでも、こういうことはあります。わたしたちは、みんな知識中毒にかかっているのです。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などから、いつの間にかいろんな知識が入つてきて、その知識が混乱し、何となく、われわれの知識で物を考える。それに合わないものは、わからないというのです。そして質問をする。そういう方に限つて、自分の言っていることが正しいと、てこでも動かない。念佛の世界は、知識の世界ではありません。

金子大榮先生は、常に知識と智慧とは違うのだと教えてくださっていました。知識だけでものを見ると、念佛の世界の純なる感情はわかりません。私はそう信ずるといっ

ても、信ずるではぜんぜん承知なさいません。理屈で答えるといわれます。

たとえば、今年はおみじが格別にきれいです。明治神宮など、多くの人がおみじを見に行かれます。わたしも参りましたが、きれいです。ことに光が当たると輝くばかりの美しさです。ほかの方も恐らくその美しさにはだされて、みなわざわざ見においています。それを、もしどうしてもおみじがそんなに美しいかと、だれかが面と向かつてその理屈を言えといわれたら、どう答えるでしょうか。答えられませんよ。理屈の中毒にかかつていられる方は、おみじを見ても、ぼたんを見ても、美しいという感じは起らないのではないかと思われるほどです。そういう方と信心の話や念佛の話をして、行き違いばかりです。

佛法は身体を通して伝う

この十余カ国の境を越え、生命を顧みずして、親鸞聖人のもとに來られた方にも、理屈が残っていたのでしょうか。往生極楽の道を理屈で、あるいは法文、証拠の文をあげて納得させてもらいたい切なるものがあつたのでしょうか。しかし、それが切なるものであればあるほど信心がない、念

佛を疑っているのです。本願を疑っているから、そのほかの理論が知りたいわけです。本願を信じ念佛もうす人には、理論なぞ全く要らない、ただ念佛になっていくのです。

親鸞聖人といえども、一挙にそこまで来られたのではなく、やはりさまざまの疑問もおきたし、いろいろの勉強もなされた。それで、少なくとも二度あるいは三度お気づきになって、それを系統立てて説いてくださったのが、教行信証に書かれている三願転入のご已証です。十九願から二十願、二十願から十八願と転入されたというのは、どういうことであろうか。最初は自分も久しく諸行往生、つまり道徳も守らなくてはならない、戒も守らなくてはならない、經典も読まなくてはならない等々をやった。教行信証に久しくと書かれていますから、ほんとうに久しくであったのでしょうか。

比叡山のご勉強でも、九歳から二十九歳まで満二十年、しかも幼年、少年、青年の一番脳の活動が盛んで、勉強心旺盛のときでした。比叡山にある本を、ことごとく読んでいられる。しかも新本が入ればすぐそれを取り寄せたり見せてもらったりして読まれた。行のほうでも常行堂で常行三昧をされた。回峰行よりむしろ常行三昧のほうがつらい

といわれます。真つ暗い堂のなかで、念佛を称えながら、真ん中の阿弥陀佛像を回るわけです。それが何日間か続く。たいがい三日くらいすると、身心ともに疲労困憊するそうです。常行三昧は阿弥陀佛が眼の前にあらわれるまで念佛を称えてまわるのです。

阿弥陀佛があらわれたもうたならよろしいのですが、恐らく、親鸞聖人の場合には、そこへ到達できなかったのだと思われまふ。それで六角堂へお参りになった。六角堂は聖徳太子の建てられたところです。聖徳太子にお祈りになったかどうかは知りませんが、とにかく夢に聖徳太子さまがあらわれて、そして在家のままでも悟ることのできる意味の示現があった。それで非常に感謝をし六角堂を出て、法然上人の門にお入りになりました。

久しく諸行往生に落ち込んでいたが、おかげをもって、念佛一つだということに、本願力のおかげによって転入させていただいた。真実の門、つまり念佛だけの世界に入らせていただいたのだとおおせになっているのです。やはり教行信証の原稿をお書きになるまでの間には、親鸞聖人といえども途中で何回か気づかれています。いろいろな苦労がございました。この世の苦勞もし、宗教上、

法文上の苦勞もして、あげく到達されたのが、「親鸞にきては」になるわけでありませう。

だから「往生の要よくよくきかるべきなり」というところが理屈の世界、あるいは学問の世界といってもよろしい。そんなに学問として知りたいというのなら、どうぞ奈良や比叡山へ行ってくれ、「親鸞にきては、たゞ念佛して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と、今日のこのわたしにとっては、たゞ念佛して弥陀におたすけただいて、往生極樂の道へ入れていただく。こういうことを自分の先生の法然上人が仰せになりました。わたしは、この法然上人のお言葉を信じてお念佛をしているだけなので、ほかに何ら別の考えを持っているわけはありません。このよきひとというのは、自分のお師匠さんです。自分を念佛の道に入れてくださった方です。

もちろん本も大事でしょう。教線も大事であります、現実にはわれわれにとつては、本当に生きたお師匠さんから教えを聞いて、それに感動して、教えられたままその道に入る。

私の場合は金子大榮先生との出会いということが根底的

な大事なことでした。法というものは、みな人間の体を通して伝わっていくものだと思います。人間生きた師匠なくして果たして法というものを悟ることができるのでしょうか。そして、箸にも棒にもかからぬ凡夫であることを、よきひとの教えをこうむって、はつきりさせられるのです。

親鸞聖人にとってはただ法然上人お一人です。生身の体で出会って、生身の声で生きた言葉で法を説いてくださって、その法に親鸞聖人はうなずかせられたのです。ですから、念佛は、浄土に生まれる種か、あるいは地獄へ落ちる業ですかと問うなら、わしはわからない。それは知りませんと答える。これはきつい言葉です。このきつい言葉もお弟子たちが、理屈で物を問い、理屈で答えてほしい様子が見えたからでしょう。

果たしてこのお答えでどれだけの方が納得されたかよくわかりません。だが少なくとも唯円には、終生忘れられない言葉であった。だからそれを思い出して「念佛は、まこと浄土にむまる、たねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」と書き残したのでありませう。

(協和醱酵工業元社長・社団法人在家佛教協会前理事長)